

博士論文

社会的排斥からの回復に関する研究
－注意の向きと感情調整に着目した検討－

平成 30 年 9 月

広島大学大学院総合科学研究科

伊崎 翼

目次

第1章 序論

第1節	適応的に生きるための感情調整	1
第2節	社会的排斥	2
第3節	社会的排斥による影響からの回復	8
第4節	感情調整	13
第5節	注意と社会的排斥からの回復	17
第6節	注意と感情	21
第7節	生理指標	23
第8節	本研究の目的	28

第2章 受容経験により排斥からの回復する際に生じる個人差

第1節	序論	30
第2節	方法	30
第3節	結果	33
第4節	考察	36
第5節	結論	37

第3章 受容経験による排斥からの回復と受容手がかりに対する注意配分との関連

第1節	研究1：序論	39
第2節	方法	39
第3節	結果	43
第4節	考察	47
第5節	研究2：序論	50
第6節	方法	50
第7節	結果	52
第8節	考察	57
第9節	結論	60

第4章 受容経験による排斥からの回復と排斥手がかりに対する注意配分との関連

第1節	序論	61
第2節	方法	62
第3節	結果	65
第4節	考察	67
第5節	結論	69

第5章 受容経験による排斥からの回復を促す方略

第1節	研究1：序論	70
第2節	方法	71
第3節	結果	75
第4節	考察	83
第5節	研究2：序論	86
第6節	方法	86
第7節	結果	87
第8節	考察	91
第9節	結論	93

第6節 注意の向きが感情に与える影響

第1節	序論	94
第2節	方法	96
第3節	結果	101
第4節	考察	108
第5節	結論	111

第7章 総合考察

第1節	研究結果のまとめ	112
第2節	社会的排斥からの回復が生じる中枢メカニズム	115
第3節	受容経験による排斥からの回復を促進させる方略	117
第4節	回復とモニタリング	121
第5節	注意の向きと感情	123
第6節	受容経験による排斥からの回復	125
第7節	本研究の意義	126
第8節	生理指標を測定する意義	128
第9節	本研究の限界と今後の検討課題	130

引用文献	133
------	-----

博士論文の要約

本論文では、受容経験による社会的排斥からの回復に関して、注意の向きと感情調整との関連に焦点を当て、回復が生じる中枢メカニズムのモデル構築と回復を促す方略の提案を行うことを目的とし、検討を行った。

第1章 研究の動向と本研究の目的

本論文は全7章から構成される。第1章では、研究の背景について概説し、各章で行う研究の目的について説明を行った。

社会的排斥 (social exclusion) とは、所属している社会集団から受け容れられていない状況と定義される (MacDonald & Leary, 2005)。他者からの排斥を経験すると、欲求脅威と呼ばれるネガティブな主観反応が生起し、感情的麻痺 (DeWall & Baumeister, 2006) など、さまざまな精神的不健康を誘発することが指摘されている (Williams, 2009)。そのため、排斥による影響から回復する方略が必要となる。

社会的排斥から回復するには、他者から受容されること (受容経験) が有効であるとされている (Tang & Richardson, 2013)。先行研究では、社会的排斥や他者からの受容への反応には、個人特性が影響を及ぼすことが指摘されている。このことから、受容経験による排斥からの回復に対しても、個人特性が影響を及ぼす可能性が考えられ、本研究ではまずこの可能性について検討を行った (第2章)。

排斥経験後の行動傾向について、所属調整モデルでは、排斥経験により低下した所属状態の回復を目的として、受容手がかかり (他者からの受容を予期させる刺激) や排斥手がかかり (他者からの排斥を予期させる刺激) という、所属に関する事象に対して注意が向きやすくなることが指摘されている (Pickett & Gardner, 2005)。そこで本研究では、受容経験により回復が生じる際の中枢メカニズムについて、受容手がかかりや排斥手がかかりに対する注意配分に焦点を当て、解明することとした (第3・4章)。中枢メカニズムとは、刺激が入力されてから反応が出力されるまでの、脳内で行われる一連の認知処理過程である。そして、検討により得られた中枢メカニズムをもとに、排斥からの回復を促す方略についても、検討を行った (第5章)。

注意の向きと感情との関連について先行研究では、ポジティブ感情下では注意は拡がり、反対にネガティブ感情下では狭まるとし、感情が注意に対して影響を及ぼすことを報告している (Fredrickson, 2001)。一方で、表情フィードバック仮説では、楽しいとは感じていない状況でも、笑顔の表情を作ることによって楽しいという感情が喚起されるなど、表情を作ることによってその表情に関連する感情が引き起こされることを報告している。そのため表情フィードバック仮説を踏まえると、注意が感情に対して影響を及ぼす可能性がある。つまり、注意の向きの方向性 (拡大・縮小) によって、感情が変化を示す可能性があり、この点につい

て検討を行った (第 6 章)。

以上より本論文では、全 7 章における検討を通して、回復が生じる際の中枢メカニズムのモデル構築と回復を促す方略の提案を、注意の向きに着目して行った。そして排斥からの回復と注意の向きとの関連を踏まえ、最終的には、注意の向きの方向性 (拡大・縮小) が感情に与える影響について検討した。

社会的排斥状況を再現するため、本研究ではコンピュータ上での 3 人でのボール回しゲームである、サイバーボール課題 (Williams et al., 2000) を用いた。サイバーボール課題では、参加者に対する投球が受容手がかりを、参加者以外のプレイヤー間での投球 (他者間での投球) が排斥手がかりを反映する (Themanson et al., 2013)。そのため、参加者に対する投球や他者間での投球が行われる回数を操作することで、排斥状況 (参加者に対して投球されない) および受容状況 (参加者に対しても投球される) の再現を行った。

注意配分を検討するため、事象に対して惹起する一過性の脳電位である、事象関連電位の測定を行った。その中でも、注意配分の指標として、刺激に対して配分された注意の程度を反映する事象関連電位である、P3b (Polich, 2007) を用いた。加えて、刺激の感覚入力を反映する P1 と N1、また刺激の知覚を反映する N2 と P3a についても測定を行い、刺激の認知を反映する P3b と合わせて、受容経験による排斥からの回復に伴う情報処理過程について検討を行った。

第 2 章 受容経験により排斥から回復する際に生じる個人差

第 2 章では、受容経験により排斥から回復する際に生じる個人差について、社会的排斥や他者からの受容への反応に対して影響を及ぼすことが報告されている 5 つの個人特性 (特性自尊心、関係不安、親密性回避、抑うつ、拒絶感受性) に焦点を当て、検討を行った。

検討の結果、特性自尊心 (自分自身を基本的に価値あるものとする感覚; Tesser, 1988) の影響が示され、特性自尊心高群では排斥経験後の欲求脅威が大きいほど、その後の受容による回復の程度も大きいことが示された。一方で、特性自尊心低群では、排斥経験後の欲求脅威と回復の程度との間の関連は示されなかった。排斥経験後には、受容手がかりや排斥手がかりといった、所属に関する事象に対して注意が向きやすくなる (Pickett & Gardner, 2005)。このことから、排斥経験による欲求脅威の程度とその後の受容経験による回復の程度との関連には、排斥経験後の刺激や状況に対する注意配分の程度が影響する可能性がある。そしてこの認知処理は、特性自尊心の高低では異なる可能性がある。

第3章 受容経験による排斥からの回復と、受容手がかりに対する注意配分との関連

第3章では、受容経験による排斥からの回復が生じる際の中枢メカニズムについて、受容手がかり（他者からの受容を予期させる刺激）に対する注意配分（P3b 振幅）に焦点を当て、検討を行った。合わせて、回復の個人差が生じる要因についても検討を行うため、個人特性として、研究1では特性自尊心、研究2では愛着スタイルに着目した。

研究1の結果、回復の程度は受容経験時における受容手がかり（参加者への投球）に対する注意配分（P3b 振幅）と正の関連を示すこと、また特性自尊心低群は高群よりも受容経験による回復の程度が小さく、受容手がかりに対する注意配分も小さいことが示された。以上の結果は、特性自尊心の高低が、受容経験による回復に影響を及ぼすことを示している。そしてこの背景には、特性自尊心低群では受容経験時における受容手がかりに対する注意配分が小さいことが関連していると考えられる。

研究2の結果、親密性回避（他者と親密になることに不快感を覚える程度; Mikulincer & Shaver, 2003）の高群では、排斥経験時と比較して受容経験時では、受容手がかりに対する注意配分（P3b 振幅）が減衰した。対して、主観的な回復は愛着スタイルの高低で差は示されず、同様に生じていた。以上の結果より、愛着スタイル、特に親密性回避高群では、排斥からの回復を生じさせるために、受容経験時における受容手がかりに対する注意配分を調節している可能性が考えられる。親密性回避の高い個人では、慢性的に保護者からの排斥を受けていた幼少期の経験が基となり、他者からの排斥に対してあまり反応を示さないという、排斥状況に対する適応が生じることが提唱されている（最適調節仮説; Chester et al., 2012）。本研究結果より、親密性回避高群では、排斥状況に対する適応に加えて、排斥からの回復が生じる状況においても、受容手がかりに対する注意配分を調節するという、適応が生じている可能性が示唆される。

研究1・2を通して、受容手がかりへの注意配分に対する個人特性の影響は、他者から受容されたと判断（認知）する段階である、P3b においてのみ示された。

第4章 受容経験による排斥からの回復と、排斥手がかりに対する注意配分との関連

第4章では、受容経験による排斥からの回復が生じる際の中枢メカニズムについて、排斥手がかり（他者からの排斥を予期させる刺激）に対する注意配分（P3b 振幅）に焦点を当て、検討した。合わせて、回復の個人差が生じる要因についても検討を行うため、個人特性として特性自尊心に着目した。

検討の結果、特性自尊心高群では、排斥経験の後半で排斥手がかり（他者間での投球）に対する注意（P3b 振幅）の減衰が生じたが、受容経験中に排斥経験前まで上昇した。一方で特性自尊心低群では、排斥経験の後半で排斥手がかりに対する注意の減衰が示され、さらに受容経験後半でも、排斥手がかりに対する注意の減衰が再度生じることが示された。第

3 章研究 1 の結果と合わせると、特性自尊心低群では高群と比べて、排斥経験後には受容・排斥手がかりに対して配分される注意は小さくなっており、周囲へのモニタリングが適切に行われていない可能性が示唆される。

排斥手がかりへの注意配分に対する特性自尊心の影響は、他者から排斥されたと判断(認知)する段階である、P3b においてのみ示された。

第 5 章 受容経験による排斥からの回復を促進させる方略の検討

第 5 章では、受容経験時に受容手がかりに対して注意が向きにくい人たち (特性自尊心低群：研究 1, 親密性回避高群：研究 2) において、受容手がかりに対する注意 (P3b 振幅) を増大させることで、主観的な回復がどのような変化を示すか検討した。P3b は刺激の回数をカウントした際に、大きな振幅を示す。そのため注意を増大させる方法として、受容手がかり (参加者に対する投球) の回数をカウントするよう教示した。

研究 1 では、受容による排斥からの回復が生じにくい特性自尊心低群において、受容手がかりに対する注意を増大させることで、主観的な回復が促進するか検討を行った。検討の結果、特性自尊心の高低群間で、受容手がかりに対する注意配分 (P3b 振幅) に差は示されなかった。また、排斥経験後の欲求脅威は特性自尊心低群の方が高群よりも高い値を示したが、受容経験後には両群間に差は示されなかった。以上の結果より、受容による排斥からの回復が生じにくい、特性自尊心低群では、受容手がかりに対して注意を促すことによって、排斥からの回復は促進される可能性が考えられる。

研究 2 では、排斥経験時と比べ、受容経験時では受容手がかりに対する注意の減衰が生じる親密性回避高群において、受容手がかりに対して注意を促すことで、主観的な回復が影響を受けるかどうか検討を行った。検討の結果、受容手がかりに対する注意配分 (P3b 振幅) は、親密性回避の高低群間で差は示されなかった。また親密性回避の高低群ともに、排斥セッションと受容セッションとの間で、受容手がかりに対する注意配分に差は示されなかった。しかし主観的な回復の程度は、親密性回避高群では低群よりも低い値を示した。以上の結果より、親密性回避高群において排斥からの回復が生じるには、受容手がかりに対して積極的に注意を向ければ良いというわけではないことが示唆される。

第 6 章 注意の向きが感情調整に及ぼす影響の検討

第 6 章では、注意の方向性 (拡大・縮小) がネガティブ刺激に対する評価や刺激呈示後の感情に与える影響について、認知的競合課題であるフランカー課題を用いて検討した。その際、注意の向きを誘導する刺激 (誘導刺激) を画面の周辺部もしくは中心部に呈示することで、注意の向きを誘導した。条件として、誘導刺激を画面の周辺に呈示する周辺条件、中央に呈示する中心条件、呈示を行わない無地条件を設定した。その結果、フランカ

一課題刺激に対する注意配分 (P3 振幅) は、周辺・中心条件で無地条件よりも大きいことが示された。また、フランク課題前後に呈示されたネガティブ画像に対する評価や画像呈示後の感情は、周辺条件でのみ課題前と比較して課題後で、ネガティブ感情の抑制を示した。このことから、周辺条件では注意の向きが周辺部まで広がったことで、ネガティブ画像に対する見方が変わり、画像により生じるネガティブ感情が抑制された可能性がある。

第 7 章 総合考察

第 7 章では、これまでの研究結果をまとめ、受容経験による社会的排斥からの回復と、注意の向きと感情との関連について、総合考察を行った。

第 2 章から第 4 章より、受容経験による排斥からの回復が生じる際の中枢メカニズムに関して、モデルの構築を行った。事象関連電位の結果から、排斥からの回復が生じる際の中枢メカニズムとして、受容手がかりを認知する段階 (P3b) が回復の程度に関与している可能性が示された。受容手がかりを適切に認知し、他者から受容されたと判断できるかどうかによって、その後の所属状態改善の認識にも違いが生じ、主観的な回復が変化を示す可能性がある。

排斥からの回復を促す方略に関して、第 5 章より、排斥からの主観的な回復の程度が小さい個人 (特性自尊心低群) では、受容手がかりに対して能動的に注意を向けることで、主観的な回復は特性自尊心高群と同程度まで増大した。その際、排斥手がかりに対する注意配分も増大したため、受容手がかりに対して能動的に注意を向けるよう促したことで、排斥手がかりに対しても注意が配分されるようになった可能性がある。このことから、受容・排斥手がかりに対して注意が配分され、周囲に対するモニタリングが適切に行われるようになることで、主観的な回復は増大することが示唆される。

また、主観的な回復と、受容手がかりおよび排斥手がかりに対する注意配分との関連から、受容経験による排斥からの回復には、2 つの段階があることが示唆される。第 1 段階は、受容手がかりが存在する状況において、受容手がかりに対して注意が向くことで、排斥からの回復が生じるようになる段階である (第 3・4 章)。そして第 2 段階は、排斥手がかりといった、受容手がかり以外の刺激に対しても注意が向くことで、排斥からの回復がより促されるようになる段階である (第 5 章)。このように、排斥からの回復が生じるには 2 つの段階があり、まず受容手がかりに対して注意が配分され、さらに他の刺激に対しても配分されるようになることで、排斥からの回復はより促される可能性が考えられる。

さらに、注意の向きと感情との関連について、第 6 章より、注意の向きを周囲へと広げることで、適応的な感情調整、特にネガティブ感情の抑制が促進される可能性が示唆された。このことから、排斥からの回復に関しても、排斥経験後に注意の向きが広がり、受容手がかりだけではなく、排斥手がかりに対しても注意が向くようになることで、主観的な回復は増大する可能性が考えられる。

本論文では，受容経験により排斥からの回復が生じる際の中枢メカニズムのモデルを構築し，回復を促進させる方略について提案した。今後はこれらの知見をもとに，受容経験による排斥からの回復を現実場面での介入に繋げることが期待される。

論文目録

氏名 伊崎 翼

印

学位論文

論文題目

社会的排斥からの回復に関する研究
—注意の向きと感情調整に着目した検討—

公表の方法 広島大学学術情報リポジトリで全文を公表するほか，広島大学大学院総合科学研究科紀要に要旨を公表し，次のとおり分割して公表する。

第2章	関係論文の2
第3章研究1	関係論文の2
第3章研究2	関係論文の1
第4章	関係論文の2
第5章研究1	国際心理生理学会誌に投稿予定 (2018 年)
第5章研究2	未定
第6章	国際心理生理学会誌に投稿予定 (2018 年)

参考論文

I 関係論文

1 著者名：伊崎 翼・小川 景子

論文題目：個人の愛着スタイルが排斥からの回復過程に及ぼす影響

雑誌名：『広島大学大学院総合科学研究科紀要 I』（査読制度あり）

第12巻, 1頁-10頁, 2017年

2 著者名：伊崎 翼・浦 光博・小川 景子

論文題目：社会的排斥からの回復に対する特性自尊心の影響：サイバーボール課題を用いた ERP 研究

雑誌名：『生理心理学と精神生理学』（査読制度あり）

印刷中 (2018 年 3 月 28 日受理：第 35 巻, 3 号掲載予定)

II その他 なし